

大和
思想

一章

はじめに

あなたは、「自分が『幸福』を求めていること」を自覚していますか？

世の中の全ての人は「幸福」を求めています。

「幸福」とは、人によって違うものなので、ある人は「いい家族をつくること」によって、ある人は「社会に貢献すること」によって、ある人は「経済的に成功すること」によって、また、ある人は「気楽に生きること」によって「幸福」に

なろうとしています。

世の中には、まれに『不幸』になりたい」と言う人がいますが、それは、その人が望んでいることですから、その人にとっての「幸福」だと言えます。

つまり、そのような人でも「幸福」を求めているのです。

「幸福」とは、『本人が望んでいる状況』において感じるもの」のことなので、『幸福』を意識したことがない人」でも、「何も考えずに生活している人」でも、「毎日を悶々と過ごしている人」でも、「幸福」を求めているのです。

つまり、世の中の全ての人が「幸福」を求めているのです。

さて、このように、世の中の全ての人には「幸福」を求めているのですが、実際に「幸福」になれる人は、ほとんどいません。

それはなぜでしょう？

それは、世の中のほとんどの人は、「『幸福』とはどのようなものか」を知らないからです。

また、「『幸福』になる方法」も知らないからです。

それらを知らないのですから、「幸福」になれないのは当然のことなのです。

『幸福』とはどのようなものか」と『幸福』になる方法」が分からないまま「幸福」を求めているのは、「目的地」が分からないまま旅をしていることと同じです。

「目的地」が分からないまま旅をしているなら、様々な経験をすることができたとしても、「目的地」に辿り着くことは絶対にありません。

なぜなら、そもそも「目的地」が分からないからです。

「目的地」が分からないということは、「どこに向かえばいいのか」「どこを目

指せばいいのか」が分からないということですから、いくら旅を続けても「目的地」に到着しようがないのです。

ですから、「目的地」に辿り着くためには、旅に出る前に「目的地」を明確にする必要がありますし、たとえ、明確にすることができないとしても、「進むべき方向」くらいは知っておく必要があります。

「進むべき方向」も知らずに、ひたすら突き進んでいたら、いずれ、「自分はどこにいるのか」「自分は何でここにいるのか」が分からなくなります。

それどころか、「進むべき方向」が北なのに、とりあえず出発した方向が南だったなら、進めば進むだけ「目的地」から遠ざかることになるのです。

「『幸福』とはどのようなものか」と「『幸福』になる方法」が分からないまま「幸福」を求めていると、これと同じことが起こります。

「『幸福』とはどのようなものか」が分からなければ、「自分は『幸福』なのか、そうでないのか」を知ることができません。

また、「『幸福』になる方法」が分からなければ、必死になればなるほど、空回りして、「幸福」から遠ざかってしまうこともあるのです。

ですから、「幸福」になるためには、まず、はじめに、「『幸福』とはどのようなものか」と「『幸福』になる方法」をしっかりと理解する必要があります。

私達は、それらをしっかりと理解することによって、はじめて、『幸福』になれる可能性」を手に入れることができますのです。

さて、それでは、「幸福」とは、どのようなものなのでしょうか？

また、『幸福』になる方法」とは、どのようなものなのでしょうか？

私は、これから、それらについて説明していききたいと思います。

本書は、「大和思想」といって「思想」について書かれた本です。

「大和思想」は、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を「目的」に設定しているので、「大和思想」を持って生きれば、誰でも、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」ができます。

もちろん、あなたも、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」ができます。

世の中の全ての人は「幸福」を求めています。

ですから、世の中の全ての人は、「『幸福』とはどのようなものか」と「『幸福』になる方法」を理解し、実際に「幸福」になるべきだと言えます。

私は、あなたが本書を読んで、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を強く望んでいます。

二〇一二年 七月 吉日 伊藤 豪

※本書は、一章から順番に読み進めることによって理解できるようになっていますので、一章から順番に読み進めてください。

また、本書を読み進めるときは、「先入観」や「固定観念」にとらわれずに読

み進めてください。

つまり、自分にとってはこれが「普通」とか「普通でない」とか、自分の国ではこれが「常識」とか「非常識」とか、そういう考えはひとまず置いておいて、「客観的」に読み進めてください。

全ての人は、少なからず「先入観」や「固定観念」を持っていきますが、それらにとらわれていると、自分の「本心」や「本当の気持ち」が分からなくなり、「正しい解釈」や「正確な理解」ができなくなります。

ですが、それらは、意識するだけでも多少緩和させることができます。

ですから、本書を読み進めるにあたっては、「先入観」や「固定観念」にとら

い。われず、あなたの「本心」や「本当の気持ち」を意識しながら読み進めてください。

一章 大和思想とは

目次

はじめに 2

序文 18

「思想」とは 25

「思想」と「その思想を持っている人の行動」と
「その行動の結果起こること」の関連性について

33

「幸福」とは 52

「幸福になれる思想」とは 68

「大和思想」とは 71

「大和思想」の世界観 80

「大和思想」の価値観 99

「大和思想」における「いいこと（正しいこと）」と

「悪いこと（間違っていること）」 107

「大和思想」における人間の存在価値 121

「大和思想」を持つことによって「生きる目的」と

「心の支え」を手に入れる 135

「自分さえ良ければいいという考え」と

「自分達さえ良ければいいという考え」について

145

「自分と他人を比較し、その優劣にこだわる考え（優れている方、勝っている方に価値があるという価値観）」について

156

「自由」について

166

まとめ

181

一章 大和思想とは

序文

それでは皆さん、これから、一章に入りたいと思います。

一章では、『大和思想』とは、どのような『思想』かを説明したいと思いません。

まず、序文では、「大和思想（やまとしそう）」という言葉の意味について説明したいと思います。

「大和思想（やまとしそ）」の「大和（やまと）」とは、「大きい和（わ）」という意味です。

そして、この「和」とは、「調和」「平和」「なごみ」「やわら」というような、一般の日本人が使っている「和」と同じ意味です。

「和」という言葉は、日本では古くから使われていて、日本最古の憲法である、聖徳太子の十七条憲法の第一条で使われているのは有名です。

日本最古の憲法の第一条には、次のように書かれています。

「一にいう。和を大切にし、いさかいをせぬようにせよ。人にはそれぞれ仲間が

あるが、全くよく悟ったものは少ない。それ故、君主や父にしたがわず、また隣人と仲違いしたりする。けれども上下のものが、睦まじく論じあえば、おのずから道理が通じ合い、どんなことでも成就するだろう」

このように、「和」という言葉は、日本では古くから使われていて、その精神は、今でも、日本人の「気質」や「文化」を特徴づけるものとなっているのです。

本書で言う「和」とは、このような意味です。

そして、「大和（やまと）」とは、この「和（わ）」の大きいバージョン。「大きい和（わ）」という意味です。

次に、本書で使っている「思想」の意味について説明します。

本書で使っている「思想」とは、

「その人の『生き方』や『行動』を決定付けている考え」

「その人が『生き方』や『行動』を決定するとき、『判断の基準』にしている考え」

という意味です。

「思想」をこのようなものとして捉えると、世の中には様々な「思想」があることが分かります。

また、世の中の全ての人が、何らかの「思想」を持ち、その「思想」に則った「生き方」をしていることも分かります。

また、「生き方」「話し方」「人との接し方」「立ち居振る舞い」等、その人の「行動」を注意深く見ていれば、「その人が持っている『思想』の断片」を見ることが出来ます。

本書では、このようなものとして「思想」という言葉を使っています。

「大和思想」は、この「思想」と「大和」を合わせた言葉です。

つまり、「大和思想」とは、単純に言うと、「大きい『和』の思想」「『調和』を重んじる思想」「『和の精神』に則った思想」だと言えるのです。

ところで、皆さん、「大和思想」は「宗教」ではありません。「大和思想」は「理論体系」です。

「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を「目的」に設定し、そこから、逆算して導きだされた「理論体系」なのです。

ですから、世の中の全ての人が「大和思想」を持って（「大和思想の理論」に則って）生きれば、世の中の全ての人が「幸福」になれるのです。

これから、この「大和思想」について説明していきます。

これから説明することの中には、「聞き慣れない概念」や「意識したことがない観点」等、理解しづらい部分があるかもしれませんが、本書で説明していることは、それほど複雑ではないので、分かりづらくても、じっくり読めば、誰でも理解できます。

ですから、分かりづらいところがあっても、繰り返し読むなどして、じっくり読み進めてください。

そして、「『大和思想』とは、どのような『思想』か」を、しっかり理解してください。

「思想」とは

序文で「思想」の意味について簡単に説明しましたが、「大和思想」を理解する上で「思想」の意味をしっかりと理解することは、とても重要なので、まず、はじめに、「思想」の意味について、もう少し詳しく説明したいと思います。

序文では、「思想」の意味を次のように説明しました。

「その人の『生き方』や『行動』を決定付けている考え」

「その人が『生き方』や『行動』を決定するとき、『判断の基準』にしている考え」

これが、本書で言う「思想」ですが、このような「思想」には様々なものがあります。

例えば、「『男らしさ』『女らしさ』という考え」「その地域特有の考え」「宗教の思想」「文化に根ざした思想、考え」「自分が関心がある生き方、考え方」「『マンガ』や『アニメ』の『登場人物』や『キャラクター』の生き方、考え方」「『今時』や『普通』という考え」等があります。

そして、その「思想」を持っている人は、「意識している」「していない」にかかわらず、その「思想」を「判断の基準」にし、それに則った「生き方」や「行動」をしています。

例えば、『男らしくあろう』『女らしくあろう』という考えを持っている人は、あらゆる場面で「男らしく」、また「女らしく」あろうとします。

「自分達はこうだ」というように、「その地域特有の考え」を持っている人は、あらゆる場面でそうあろうとします。

何らかの「宗教の思想」を持っている人は、その「思想」に則った「生き方」や「行動」をしています。

「文化に根ざした思想、考え」を持っている人は、その「思想」「考え」に則った「生き方」をしています。

例えば、「ロックンロール（という文化）の思想、考え」に強い影響を受けている人は、そのキャッチフレーズである「セックス、ドラッグ、ロックンロール」というような「生き方」をしていますし、「ヒップビー」「パンク」「ヒップホップ」「レゲエ」等の文化から強い影響を受けている人も、その「思想」「考え」に則った「生き方」をしています。

また、何らかの「生き方」や「考え方」に強い関心を持っている人は、その「生き方」や「考え方」に則った「生き方」をしようとします。

例えば、「セレブ」や「いけてるビジネスマン」に強い関心がある人は、そのような「生き方」をしようとします。

人は「マンガ」や「アニメ」の「登場人物」や「キャラクター」からも影響を受けるので、特に気に入った「マンガ」や「アニメ」の「登場人物」や「キャラクター」がある人は、そこで表現されている「思想」「考え」に則った「生き方」「行動」「立ち居振る舞い」をしようとしています。

また、「今時」や「普通」というものを強く意識している人は、常に、「今時」「普通」と言われている「生き方」や「行動」をしようとしています。

このように、世の中には様々な「思想」があり、その「思想」を持っている人は、「意識している」「していない」にかかわらず、その「思想」を「判断の基準」にし、それに則った「生き方」や「行動」をしているのです。

さて、このような、「その人の『生き方』や『行動』を決定付けている考え」「その人が『生き方』や『行動』を決定するとき『判断の基準』にしている考え」が、本書で言う「思想」なのです。

「思想」とは、「自分が持っている『思想』は〜である」というように、「一言で言えるもの」ばかりではありません。

ですが、たとえば、「一言では言い表せない」としても、世の中の全ての人は、何らかの「思想」を持っているのです。

そして、その「思想」を「判断の基準」にし、それに則った「生き方」や「行

動」をしているのです。

本書で言う「思想」とは、このようなものなのです。

ところで、あなたは、自分が持っている「思想」を意識したことがあるでしょうか？

もし、あなたが、「自分が持っている『思想』を意識したことがなく、それがどういうものか分からない」と言うなら、普段の自分の「行動」「立ち居振る舞い」「考え方」等を思い出してみてください。

そこには、あなたの「思想の断片」が見えるはずでず。

全ての人の「行動」には、一定の「パターン（傾向）」があるので、普段の自分の「行動」「立ち居振る舞い」「考え方」等を思い出せば、そこに、一定の「パターン（傾向）」があることが分かります。

そして、「自分は、なぜ、その『行動パターン（傾向）』をしているのか」をよく考えれば、「自分が『判断の基準』にしている考え」、つまり、自分が持っている「思想」を知ることができるのです。

自分が持っている「思想」を意識したことがない人は、これを機会に、自分が持っている「思想」を意識してほしいと思います。

「思想」と「その思想を持っている人の行動」と「その行動の結果起こること」の関連性について

先ほど説明したように、世の中の全ての人は、何らかの「思想」を持っているのですが、「思想」と「その『思想』を持っている人の行動」と「その『行動』の結果起こること」は関連しています。

「思想」とは、「その人の『生き方』や『行動』を決定付けている考え」「その人が『生き方』や『行動』を決定するとき」「判断の基準」にしている考え」のことなので、「思想」と「その『思想』を持っている人の行動」は関連していません。

例えば、「『自分さえ良ければいい』という考え（思想）」を持っている人は、あらゆる場面で、「『自分勝手』な『わがまま』な行動」をします。

また、「『共存共栄の世の中を維持して生きる』という考え（思想）」を持っている人は、あらゆる場面で、相手を「尊重」し、「気遣い」をし、「『調和』を乱さない行動」をします。

また、「『目的を実現させるためには努力をする必要がある』という考え（思

想」を持ってゐる人は、「目的」を実現させるときには、必ず「努力」をします。

このように、「思想」と「その『思想』」を持ってゐる人の「行動」は関連してゐるのです。

また、「その『思想』」を持ってゐる人の「行動」と「その『行動』」の結果起こること」も関連してゐます。

例えば、あらゆる場面で「『自分勝手』な『わがまま』な行動」をしてゐると、その結果、「信用」を失ったり、みんなに嫌われたり、「人間関係」が悪くなったりします。

また、あらゆる場面で相手を「尊重」し、「気遣い」をし、「『調和』を乱さない行動」をしていると、その結果、みんなに「信用」されたり、みんなに好かれたり、「人間関係」が良くなったりします。

また、何らかの「目的」を表現させるときに、必ず「努力」をしていると、その結果、「努力」をしない場合より「いい結果」を得ることができます。

このように、「その『思想』を持っている人の行動」と「その『行動』の結果起こること」も関連しているのです。

このように、「思想」と「その『思想』を持っている人の行動」も、「その

『思想』を持っている人の行動」と「その『行動』の結果起こること」も関連しているのです。

ですから、このことから「『思想』と『その思想を持っている人の行動』と『その行動の結果起こること』は関連している」と言えるのです。

さて、このように、「思想」と「その『思想』を持っている人の行動」と「その『行動』の結果起こること」は関連しているのですが、これらを（原因）と（現象）に当てはめると次のようになります。

「思想」Ⅱ（原因）、「その『思想』を持っている人の行動」Ⅱ（現象1）、
「その『行動』の結果起こること」Ⅱ（現象2）

そして、これを先ほどの例に当てはめると次のようになります。

『自分さえ良ければいい』という考え（原因）を持っている人は、「あらゆる場面で『自分勝手』な『わがまま』な行動をする（現象1）」ので、その結果、『信用』を失ったり、みんなに嫌われたり、『人間関係』が悪くなったりする（現象2）」。

『共存共栄の世の中を維持して生きる』という考え（原因）を持っている人は、「あらゆる場面で相手を『尊重』し、『気遣い』をし、『調和を乱さない行動』をする（現象1）」ので、その結果、「みんなに『信用』されたり、みんなに好かれたり、『人間関係』が良くなったりする（現象2）」。

『目的を實現させるためには努力をする必要がある』という考え（原因）を持つている人は、『目的』を實現させるときには、必ず『努力』をする（現象1）ので、その結果、『努力』をしない場合より『いい結果』を得ることができる（現象2）』。

このように、「思想」と「その『思想』を持つている人の行動」と「その『行動』の結果起こること」は関連しているので、この「関連性」をよく考えれば、「どのような『思想（原因）』を持つている人が、どのような『結果（現象2）』になるか」が分かります。

また、逆に考えれば、『理想の結果（現象2）』を得るためには、どのような『思想（原因）』を持つ必要があるか』も分かります。

先ほどの例で言うなら、「『自分さえ良ければいい』という考え（原因）」を持つている人がいたら、「その人が、いずれ『信用』を失ったり、みんなに嫌われたり、『人間関係』が悪くなったりすること（現象２）」が分かります。

また、「『共存共栄の世の中を維持して生きる』という考え（原因）」を持つている人がいたら、「その人が、いずれ、みんなに『信用』されたり、みんなに好かれたり、『人間関係』が良くなったりすること（現象２）」が分かります。

また、「『目的を實現させるためには努力をする必要がある』という考え（原因）」を持つている人がいたら、「その人が、いずれ『努力』をしない場合より『いい結果』を得ること（現象２）」が分かります。

また、逆に考えれば、「みんなに『信用』され、みんなに好かれ、『人間関係』を良くする（現象2）」ためには、『自分さえ良ければいい』という考え（原因）ではなく、『共存共栄の世の中を維持して生きる』という考え（原因）を持つ必要があることが分かりますし、「いい結果を得る（現象2）」ためには、『目的を実現させるためには努力をする必要がある』という考え（原因）を持つ必要があることも分かります。

さて、このように、「思想」と「その『思想』を持っている人の行動」と「その『行動』の結果起こること」は関連しているのですが、この「関連性」は「個人」のみに当てはまることではなく、「集団」にも同じように当てはまります。

例えば、『自分さえ良ければいい』という考え（原因）を持っている百人

の「集団」があるとしめます。

そのような「考え（原因）」を持っている人達は、あらゆる場面で「『自分勝手』な『わがまま』な行動をする（現象1）」ので、その結果、「その『集団』は『まとまりがない状態』になります（現象2）」。

また、「『共存共栄の世の中を維持して生きる』という考え（原因）」を持っている百人の「集団」があるとしめます。

そのような「考え（原因）」を持っている人達は、あらゆる場面で「相手を『尊重』し、『気遣い』をし、『調和を乱さない行動』をする（現象1）」ので、その結果、「その『集団』は『まとまりがある状態』になります（現象2）」。

このように、「『思想』と『その思想を持っている人の行動』と『その行動の結果起こること』の関連性」は、「集団」にも当てはまるのです。

ですから、「集団」においても、この「関連性」をよく考えれば、「どのような思想（原因）」を持っていてる人の『集団』が、どのような『状態（現象2）』になるか」が分かりますし、逆に考えれば、「その『集団』を『理想の状態（現象2）』にするためには、その『集団』を構成する全ての人は、どのような『思想（原因）』を持つ必要があるか」も分かります。

例えば、「『自分さえ良ければいい』という考え（原因）」を持っている百人の「集団」があったら、「その『集団』が、いずれ『まとまりがない状態』になること（現象2）」が分かりますし、「『共存共栄の世の中を維持して生きる』という考え（原因）」を持っている百人の「集団」があったら、「その『集団』が、いずれ『まとまりがある状態』になること（現象2）」が分かります。

また、逆に考えれば、「集団を『まとまりがある状態』にする（現象2）」ためには、その「集団」を構成する全ての人が、「『共存共栄の世の中を維持して生きる』という考え（原因）」を持つ必要があることも分かるのです。

また、当然のことですが、同じ「思想（原因）」を持っている人の数が増えれば、「その結果起こること（現象2）」の規模は大きくなります。

例えば、「『自分さえ良ければいい』という考え（原因）」を持っている人が、百人いる場合と、一万人いる場合と、一億人いる場合では、「その『思想』によって起こる社会現象（現象2）」の規模は同じではありません。

また、「『共存共栄の世の中を維持して生きる』という考え（原因）」を持つ

ている人が、百人いる場合と、一万人いる場合でも、「その『思想』」によって起こる社会現象（現象2）」の規模は同じではありません。

このように、同じ「思想（原因）」を持っている人の数が増えれば、必然的に、「その結果起こること（現象2）」の規模も大きくなるのです。

さて、これが、「『思想』」と『その思想を持っている人の行動』」と『その行動の結果起こること』の「関連性」なのです。

ですから、この「関連性」をしっかりと理解すれば、「人間関係」や「自分を取り巻く状況」といった「自分の人生の状態」が、自分が持っている「思想」が原因でつくりだされていること（その「思想」を持っている結果、今の「人生の状

態」があること」が分かるようになります。

もちろん、「人生」には、自分の力ではどうにもならないこともあります。自分の力が及ぶことに関しては、全てのこと、自分が持っている「思想」が原因でつくりだされているのです。

また、この「関連性」をしっかりと理解すれば、「人間社会の状態」が、世の中の多くの人が持っている「思想」が原因でつくりだされていることも、分かるようになります。

世の中に存在する全ての「建造物」「工業製品」「科学技術」「社会システム」等、「人間社会を構成する全てのもの」は、人間によってつくりだされます。

また、「政治活動」「経済活動」「社会活動」「文化活動」「教育」等、「人間社会において行なわれる全ての活動」は、人間によって行なわれます。

そして、それらを行なう人間の「生き方」や「行動」を決定付けている「考え」が「思想」なのです。

ですから、世の中の全ての人が「まともで正しい思想」を持っていれば、そういう人達は、「まともで正しい行動」をし、「まともで正しい社会」をつくり、「まともで正しい運営」をするので、「人間社会を構成する全てのもの」「世の中で起こる全ての出来事」「人間社会そのもの」は、「まともで正しいもの」になり、逆に、世の中の全ての人が「間違った悪い思想」を持っていたら、そういう人達は、「間違った悪い行動」をし、「間違った悪い社会」をつくり、

「間違った悪い運営」をするので、「人間社会を構成する全てのもの」「世の中で起こる全ての出来事」「人間社会そのもの」は、「間違った悪いもの」になるのです。

このことから分かるように、「人間社会の状態」は、世の中の多くの人が持っている「思想」が原因でつくりだされているのです。

また、これらのことから、「『思想』と『その思想を持っている人の行動』と『その行動の結果起こること』の『関連性』が、最終的には、人間の『幸福』にまでつながっていること」が分かります。

人間が「幸福」になるためには、「自分の人生の状態」と「人間社会の状態」

が「いい状態」である必要がありますが、「自分の人生の状態」は、自分が持っている「思想」によってつくりだされますし、「人間社会の状態」は、世の中の多くの人が持っている「思想」によってつくりだされます。

ですから、人間は、「『自分の人生の状態』と『人間社会の状態』を『いい状態』にすることができ思想」を持って生きれば「幸福」になれますが、「『自分の人生の状態』と『人間社会の状態』を『悪い状態』にする思想」を持って生きていたら「不幸」になるのです。

このことから分かるように、「『思想』と『その思想を持っている人の行動』と『その行動の結果起こること』の関連性」は、最終的には、人間の「幸福」にまでつながっているのです。

ほとんどの人は考えたことがないかもしれませんが、これが「思想」であり、『思想』と『その思想を持っている人の行動』と『その行動の結果起こること』の関連性」なのです。

さて、このように、「『思想』と『その思想を持っている人の行動』と『その行動の結果起こること』の関連性」は、最終的には、人間の「幸福」にまでつながっているのです。

ですから、人間は、「『幸福』になれる思想」を持って生きれば「幸福」になりますし、「『不幸』になる思想」を持って生きれば「不幸」になるのです。

「人間が『幸福』になれるかどうか」は、「どのような『思想』を持って生きる

か」によって決まるのです。

人間が「幸福」になるためには、このことをしっかり理解する必要があります。

『『思想』と『その思想を持っている人の行動』と『その行動の結果起こること』の関連性』が、最終的には、人間の「幸福」にまでつながっていることを、しっかり理解する必要があります。

「幸福」とは

先ほど説明したように、「『思想』と『その思想を持っている人の行動』と『その行動の結果起こること』の関連性」は、最終的には、人間の「幸福」にまでつながっています。

ですから、人間が「幸福」になるためには、「『幸福』になれる思想」を持って生きる必要があります。

ですが、「『幸福』になれる思想」とは、一体どのようなものなのでしょう？

それを知るためには、まず、「『幸福』とは、どのようなものか」を知る必要があります。

そこで、ここでは、「『幸福』とは、どのようなものか」を説明したいと思います。

「幸福」とは、「目で見えるもの」ではありませんし、「耳で聞くもの」でもありません。

「幸福」とは、「本人が望む状況」「本人が欲するいくつかの『要素』が合わさった状況」において「感じるもの」です。

また、「幸福」とは、「本人が望む状況」「本人が欲するいくつかの『要素』が合わさった状況」において「感じるもの」なので、このことから、「『幸福』になる」とは、「『幸福だと思える状況』を手に入れること」だと言えます。

また、この『幸福』だと思える状況』には様々なものがあります。

人間は、様々な状況において「幸福」を感じることができるので、「『幸福』だと思える状況』には様々なものがあるのです。

ですが、人間が「幸福」になるためには、必要不可欠な「要素」が一つありません。

それは、「『自分の尊厳が保たれていること（自分が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされていること）』によって得られる『精神的充足、安定』」です。

この「『自分の尊厳が保たれていること』によって得られる『精神的充足、安定』」こそが、人間が「幸福」になる上で必要不可欠な「要素」なのです。

人間は、「社会」をつくり、その中で生活する性質を持つ「社会的生き物」です。

人間は、その歴史が始まるずっと前から、「社会」をつくり、その中で生活し

てきました。

この「社会的生き物」の性質からでしょうが、人間は、「集団」において、「お前は必要ない」「不必要な存在だ」「お前のことなど、どうでもいい」と言われ、そのような扱いを受けていたら、つまり、「自分の『尊厳』が保たれていない状況（自分が『価値ある存在』『尊い存在』として、認められ、大切にされていない状況）」であつたら、「幸福」を感じることはできません。

「家族」において、そのような状況であつたら、「家族」において「幸福」を感じることはできません。

「地域社会」において、そのような状況であつたら、「地域社会」において「幸

「福」を感じることはできません。

「友人の集まり」において、そのような状況であつたら、「友人の集まり」において「幸福」を感じることはできません。

「会社」において、そのような状況であつたら、「会社」において「幸福」を感じることはできません。

「国家」において、そのような状況であつたら、「国家」において「幸福」を感じることはできません。

何らかの「集団」において自分の「尊厳」が保たれていなくても、別の「集団」

において「尊厳」が保たれているなら、「幸福」を感じることは可能です。

例えば、「友人の集まり」や「会社」において、自分の「尊厳」が保たれていなくても、「家族」や「サークル」等において「尊厳」が保たれているなら、それが「心の支え」となるので、「幸福」を感じることは可能です。

ですが、「家族」「地域社会」「友人の集まり」「会社」「国家」、その他、自分が所属している全ての「集団」において、「お前は必要ない」「不必要な存在だ」「お前のことなど、どうでもいい」と言われ、そのような扱いを受けているなら、つまり、自分の「尊厳」が保たれていないなら、「幸福」を感じることは全くできないのです。

「自分の『尊厳』が全く保たれていない状況（誰からも『価値ある存在』『尊い存在』として、認められ、大切にされていない状況）」とは、言うなれば、「精神的に『孤独』な状況」です。

人間は「社会的生き物」の性質からだと思いますが、「精神的に『孤独』な状態」では、「幸福」を感じることはできないのです。

「孤独感」は、全ての人が持っている「感覚」ですが、人間は、極度の「孤独」には堪えられません。

どれだけ「裕福な人」でも、どれだけ「能力が高い人」でも、どれだけ「強い権力を持っている人」でも、極度の「孤独」には堪えられないのです。

たとえ多くの人と接していても、「みんなに嫌われている状況」「みんなに
じめられている状況」、また、実際はそうでなくても『自分は孤立している』
と思いついて入っている状況」といった、「精神的に『孤独』な状況」では、「幸福」
を感じることはできないのです。

人間は、『自分は完全に孤立している』という「感覚」を強く持つと、やがて、
「自分は何のために存在しているのだろうか?」「生きていく意味があるのだろうか?」
「自分に『存在価値』はあるのだろうか?」と、極度の「孤独感」や「不
安感」に襲われます。

そして、その「感覚」が強まると、最終的には「自殺」に至ることもあります。

世の中で起こっている多くの「自殺」の根底には、「自分は何の集団にも属していない」という感覚からくる「孤独感」や「不安感」があるとされているのです。

このように、人間は、「精神的に『孤独』な状況」では、「幸福」を感じることはできないのです。

つまり、「自分の『尊厳』が、全く保たれていない状況（誰からも『価値ある存在』『尊い存在』として、認められ、大切にされていない状況）」では、「幸福」を感じることはできないのです。

これらのことから分かるように、人間が「幸福」になるためには、「『自分の尊厳が保たれていること（自分が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされていること）』によって得られる『精神的充足、安定』が必要不可欠なのです。

さて、人間が「幸福」になるためには、「『自分の尊厳が保たれていること』によって得られる『精神的充足、安定』」が必要不可欠なのですが、中には、「人間が『幸福』になるためには、物質的に満たされている必要がある」と言う人がいるかもしれません。

確かに、物質的に満たされることによって、心が満たされることがあるのは事

実です。

ですが、世界には、ジャングルの奥地で、裸同然の姿で、物質的には全く豊かとは言えない生活を送っている先住民がいますが、彼らが、「『物質的に豊かでない』という理由で『不幸』を感じている」ということはありません。

それどころか、彼らは、「経済格差」や「『物質的に豊かになりたい』という欲求」等に苦しむことなく生活しています。

彼らは、「物質的な豊かさ」から生まれる「ストレス」を全く感じずに生活しているのです。

世の中には、自分は「大きな家」がなければ、「愛車」がなければ、「おいしい食べ物」が食べられなければ「幸福」を感じられないと言う人がいますが、人間は、それらがあるだけで「幸福」を感じられるわけではありません。

「大きな家」があっても一緒に暮らす「家族」がいなく、「愛車」があっても一緒に乗ってくれる「友人」がいなく、「おいしい食べ物」があっても一緒に食べる「仲間」がいなければ、「幸福」を感じることはできないのです。

また、いたとしても、「自分の『尊厳』が保たれていない状況（誰からも『価値ある存在』『尊い存在』として、認められ、大切にされていない状況）」であったら、「幸福」を感じることはできないのです。

このことから分かるように、人間が「幸福」になるためには、「『自分の尊厳が保たれていること（自分が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされていること）』によって得られる『精神的充足、安定』」が必要不可欠なのです。

さて、このように、人間が「幸福」になるためには、「『自分の尊厳が保たれていること』によって得られる『精神的充足、安定』」が必要不可欠なのです。

ですから、このことから、「幸福」とは、「『自分の尊厳が保たれていることによって得られる精神的充足、安定を得ている状況』において、感じることできるもの」のことだと言えます。

人間は、この「精神的充足、安定」を得ている状況を基に、さらに物質的に豊かになり、「地位」や「名声」を得、自分が望んでいることを実現させることにより、より大きな「幸福」を感じることができるのです。

逆に、この「精神的充足、安定」を得ていなければ、どれだけ物質的に豊かになり、「地位」や「名声」を得、自分が望んでいることを実現させても、本心から「幸福」を感じることはできないのです。

あなたが、今までの人生の中で、最も「幸福」を感じたのはいつですか？

そのときのことを思い出してください。

そのとき、あなたの「尊厳」は保たれていた（あなたは『価値ある存在』『尊い存在』として、認められ、大切にされていた）はずです。

たとえば、直接「あなたの価値を認める」と言われていなかったとしても、また、直接「大切にする行動」をされていなかったとしても、「あなたの『尊厳』が全く保たれていない状況（誰からも『価値ある存在』『尊い存在』として、認められ、大切にされていない状況）」ではなかったはずですよ。

人間が「幸福」になるためには、そのときのような、『自分の尊厳が保たれていること』によって得られる『精神的充足、安定』が必要不可欠なのです。

「幸福」とは、そのときのような、「『自分の尊厳が保たれていること（自分が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされていること）によって得られる精神的充足、安定を得ている状況』において、感じる事ができるもの」のことなのです。

「幸福になれる思想」とは

先ほど説明したように、「幸福」とは、「『自分の尊厳が保たれていること』によって得られる精神的充足、安定を得ている状況』において、感じる事ができる

るもの」のことです。

ですから、このことから、「『幸福』になれる思想」とは、「『自分の尊厳を保つこと（自分が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされている状況を保つこと）』ができる思想」のことだと言えます。

人間が「幸福」になるためには、「『自分の尊厳が保たれていること』によって得られる『精神的充足、安定』」が必要不可欠です。

ですから、「『幸福』になれる思想」であるためには、「自分の『尊厳』を保つこと」が絶対条件なのです。

「その『思想』を持って生きていけば、自分の『尊厳』を保つことができる」、
このような「思想」でなければならぬのです。

「幸福」とは、『自分の尊厳が保たれていることによって得られる精神的充足、
安定を得ている状況』において、感じる「ことができるもの」のことです。

ですから、『幸福』になれる「思想」とは、『自分の尊厳を保つこと（自分
が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされている状況を保つこ
と）』ができる「思想」のことなのです。

「大和思想」とは

「大和思想」とは、「『世の中の全ての人が、自ら率先して、普段自分が関わっている全体をまとめること』によって、『共存共栄の世の中』を実現させ、世の中の全ての人と共に『幸福』になる」という「思想」です。

世の中の全ての人は「幸福」を求めています。

ですから、人間は、「自分一人が『幸福』になること」を考えるのではなく、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を考えるべきだと言えます。

ですから、「大和思想」は、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を「目的」に設定しています。

また、「大和思想」では、「『世の中の全ての人と共に幸福になる』ためには、世の中は、『共存共栄の世の中』である必要がある」と考えます。

ここで言う「共存共栄の世の中」とは、「人間」「動物」「植物」等、「『世の中』に存在する全ての生物」が共に生き、共に栄える世の中」のことです。

また、それは、「『世の中に存在する全ての生物』の『尊厳』が保たれている世の中（全ての生物が、『価値ある存在』『尊い存在』として、認められ、大切

にされている世の中」の事です。

人間が「幸福」になるためには、『自分の尊厳が保たれていること』によって得られる『精神的充足、安定』が必要不可欠ですが、このような世の中であれば、世の中の全ての人の「尊厳」は、常に保たれています。

ですから、世の中が「共存共栄の世の中」であれば、世の中の全ての人が、常に「幸福」を感じることができます。

ですから、「大和思想」では、『世の中の全ての人と共に幸福になる』ためには、世の中は、『共存共栄の世の中』である必要がある」と考えるのです。

また、「大和思想」では、「『共存共栄の世の中を實現させ、維持する』ためには、世の中の全ての人が、自ら率先して、『普段自分が関わっている全体（集団、組織）をまとめる（共存共栄の世の中を維持している状態にする）』必要がある」と考えます。

全ての人は、毎日、「家族」「地域社会」「友人の集まり」「学校」「会社」「国家」「世界」等、様々な「全体（集団、組織）」と関わっています。全ての人が、それらの「全体」にあって、ただ「なんとなく」過ごすのではなく、常に、『その全体をまとめる』ための働きかけ（『その全体を共存共栄の世の中を維持している状態にする』ための働きかけ）をしていけば、「効率良く『共存共栄の世の中』を實現させ、維持すること」ができます。

ですから、「大和思想」では、『共存共栄の世の中を實現させ、維持する』

ためには、世の中の全ての人が、自ら率先して、『普段自分が関わっている全体をまとめる（共存共栄の世の中を維持している状態にする）』必要がある」と考えるのです。

また、人間が「幸福」になるためには、「自分の『尊厳』を保つ（『自分が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされている状況』を保つ）」必要がありますが、「大和思想」では、『自分の尊厳を保つ』ためには、常に、自ら率先して、『普段自分が関わっている全体をまとめるための働きかけ（共存共栄の世の中を維持している状態にするための働きかけ）』をして生きる必要がある」と考えます。

どれだけ「自分の『尊厳』を保ちたい（『自分が価値ある存在、尊い存在とし

て、認められ、大切にされている状況」を保ちたい」と思っても、実際の「生き方」が「価値のない生き方」であつたら、誰も、自分のことを「価値ある存在」「尊い存在」として認めてくれません。

「自分の『尊厳』を保つ」ためには、「自分の『尊厳』を保ちたい」と思うだけでなく、実際に「価値ある生き方」をする必要があるのです。

「常に、自ら率先して、『普段自分が関わっている全体をまとめるための働きかけ（共存共栄の世の中を維持している状態にするための働きかけ）をして生きる」というのは、世の中の全ての人の「幸福」につながる「価値ある生き方」です。

ですから、常に、そのような「生き方」をしていれば、「自分の『尊厳』を保

つこと（『自分が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされている状況』を保つこと）」ができるのです。

ですから、「大和思想」では、「『自分の尊厳を保つ』ためには、常に、自ら率先して、『普段自分が関わっている全体をまとめるための働きかけ（共存共栄の世の中を維持している状態にするための働きかけ）』をして生きる必要がある」と考えるのです。

このように、「大和思想」は、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を「目的」に設定し、「『世の中の全ての人と共に幸福になる』ためには、世の中は、『共存共栄の世の中』である必要がある」と考え、「『共存共栄の世の中を実現させ、維持する』ためには、世の中の全ての人が、自ら率先して、『普段

自分が関わっている全体をまとめる』必要がある」と考え、そして、「『自分の尊厳を保つ』ためには、常に、自ら率先して、『普段自分が関わっている全体をまとめるための働きかけ』をして生きる必要がある」と考えるのです。

世の中の全ての人が、自ら率先して、普段自分が関わっている「全体（集団、組織）」をまとめる（「共存共栄の世の中を維持している状態」にする）。

そうすることによって、「共存共栄の世の中」が実現し、維持される。

また、全ての人の「生き方」が「価値ある生き方」になる。

そして、「共存共栄の世の中」が実現し、維持され、全ての人の「生き方」が「価値ある生き方」になることによって、世の中の全ての人々が「幸福」になる。

これが「大和思想の理論」なのです。

ですから、世の中の全ての人が「大和思想」を持って（『大和思想の理論』に則って）生きれば、世の中の全ての人が「幸福」になれるのです。

このように、「大和思想」とは、『世の中の全ての人が、自ら率先して、普段自分が関わっている全体をまとめること』によって、『共存共栄の世の中』を實現させ、世の中の全ての人と共に『幸福』になる」という「思想」なのです。

「大和思想」の世界観

「大和思想」の世界観は、次のようなものです。

1、人間は、「宇宙の生成、発展のメカニズム」の中に存在している

宇宙は、ビッグバンから始まったとされています。

宇宙は、ビッグバン（大爆発）と同時に、らせん状に回転しながら全方向に広

がっていききました。

時間がたつにつれ、恒星ができ、その周りに惑星ができ、さらに、その周りに衛星もできました。

恒星はエネルギーを放射し、惑星は自転しながら恒星の周りを公転しています。

地球は、このような惑星の一つですが、当初は、水も空気もない、ただの岩の塊でした。

ですが、時間がたつにつれ、雨が降り、海ができ、地球の誕生から6億年たったころ、最初の生命が誕生しました。

そして、その生命は、長い年月を経て様々な生物に進化し、40億年たったころ、人類が誕生しました。

このことから分かるように、私達人類は、『宇宙の生成、発展の歴史』の延長線上」に存在しているのです。

また、宇宙は現在も生成、発展しているので、私達人類は、「宇宙の生成、発展の過程」に存在していると言えるのです。

さて、「宇宙の生成、発展の過程」に存在している私達人間は、言語をつくり、科学、学問を発展させ、様々な工業製品をつくり、様々な社会活動を行なってい

ますが、これらも全て、「宇宙の生成、発展の過程」の出来事だと言えます。

また、このことから、「人間が行なっている全ての活動（特に、人類が存続するために必要な活動）は、『宇宙の生成、発展のメカニズム』に則っている」と言えます。

「宇宙の生成、発展のメカニズム」がどのようなものであるのか、具体的には、誰にも分かりません。

ですが、「宇宙の生成、発展の過程」に存在している人間が、様々な法則、理論に則って活動し、それが正しければうまくいき、間違っていればうまくいかないのですから、「人間の全ての活動（特に、人類が存続するために必要な活動）は、『宇宙の生成、発展のメカニズム』に則って行なわれている」と言えるので

す。

私達人間は、「宇宙の生成、発展の過程」に存在しています。

そして、人間の全ての活動（特に、人類が存続するために必要な活動）は、「宇宙の生成、発展のメカニズム」に則って行なわれているのです。

ですから、「大和思想」では、「人間は、『宇宙の生成、発展のメカニズム』の中に存在している」と考えるのです。

2、人間は「自然界」の中に存在している

地球に最初の生命が誕生してから、長い年月を経て、地球上に様々な生物が誕生しました。

そして、「植物」「昆虫」「魚類」「両生類」「爬虫類」「鳥類」「哺乳類」等が誕生した後、それら様々な生物によって成り立っている「自然界」に、人類が誕生しました。

現在の多くの人の目には、人間が「自然界」を支配しているように見えるかも知れません。

ですが、人間が「自然」をつくり、その中で様々な生物が活動するようになったのではなく、あくまで、様々な生物が誕生した後、人類が誕生したのです。

宇宙の誕生、地球の誕生、「自然界」の誕生の後に、「自然界」の中に人類が誕生したのです。

また、人間は、その「自然界」から様々な「恩恵」を受けることによって、生きることができています。

人間は、「植物」が酸素をつくり出すおかげで、生きることができています。

また、「植物」と「動物」を食料にすることによって、生きることができてい

ます。

また、その「植物」と「動物」は、「微生物」の働きのおかげで生きることができています。

また、人間の腸内には、100兆個から1000兆個の「腸内細菌」がいると言われていますが、彼らの働きのおかげで、食べたものを分解し、吸収することができています。

人間は、この他にも、「自然界」から様々な恩恵を受けることによって、生きることができているのです。

このように、人間は、宇宙の誕生、地球の誕生、「自然界」の誕生の後に、「自然界」の中に誕生した存在であり、また、その「自然界」から様々な「恩恵」を受けるところによって、生きることができているのです。つまり、人間は、「自然界」に依存して生きています。

ですから、「大和思想」では、「人間は『自然界』の中に存在している」と考えるのです。

3、全ての人は、様々な「全体」の一部として存在している

全ての人は、普段の生活の中で、「家族」「地域社会」「友人の集まり」「会

社」「ボランティア団体」「サークル」「国家」等、様々な「全体（集団、組織）」と関わっています。

ここで言う「『全体（集団、組織）』と関わっている」とは、「『全体（集団、組織）』に所属している」ということですが、「人が『全体（集団、組織）』に所属している」ということは、「単に所属している」ということではなく、「『その全体（集団、組織）の活動を行なっている状態』で所属している」ということです。

つまり、「『その全体（集団、組織）の活動の一部分を担っている状態』で所属している」ということです。

ですから、全ての人は、「家族」「地域社会」「友人の集まり」「会社」「ボ

ランティア団体」「サークル」「国家」等、様々な「全体」と関わっていますが、それぞれの「全体」において、「『その全体の活動の一部分を担っている状態』で存在している」という意味で、「『その全体の一部分』として存在している」と言えます。

「家族」においては、「『その家族の活動の一部分を担っている状態』で存在している」という意味で、「その家族の一部分」として存在しています。

「地域社会」においては、「『その地域社会の活動の一部分を担っている状態』で存在している」という意味で、「その地域社会の一部分」として存在しています。

「友人の集まり」においては、「『その友人の集まりの活動の一部分を担ってい

る状態』で存在している」という意味で、「その友人の集まりの一部」として存在しています。

「会社」においては、「『その会社の活動の一部分を担っている状態』で存在している」という意味で、「その会社の一部分」として存在しています。

「ボランティア団体」においては、「『そのボランティア団体の活動の一部分を担っている状態』で存在している」という意味で、「そのボランティア団体の一部分」として存在しています。

「サークル」においては、「『そのサークルの活動の一部分を担っている状態』で存在している」という意味で、「そのサークルの一部分」として存在しています。

「国家」においては、「『その国家の活動の一部分を担っている状態』で存在している」という意味で、「その国家の一部分」として存在しています。

このように、全ての人は、普段の生活の中で様々な「全体」と関わっています
が、それぞれの「全体」において、「その全体の一部分」として存在しているの
です。

全ての人は、それぞれが、自分の考えを持った「独立した個人」です。

ですが、「全体」においては「独立した個人」であると同時に、「その全体の

一部分」として存在しているのです。

たとえば、「全体」の活動に関わっていないとしても、「『その全体の活動の一部分を担っている状態』で所属している」のが、「全体を構成する人」の本来の姿、あるべき姿なのです。

ですから、「大和思想」では、「全ての人は、様々な『全体』の一部分として存在している」と考えるのです。

4、人間は、『過去から未来へつながる情報ネットワーク』の一部分として存在している

全ての人は、その人が存在するということは、両親が存在するということですし、両親にもその両親が存在するということですし、さらに、その両親が存在するということですが、これをひたすら遡ると、人類の誕生、さらには生命の誕生にまで遡ります。

これは逆に言うと、私達の祖先は、生命の誕生から40億年もの間、ひたすら遺伝情報を伝えてきたということであり、私達は、その遺伝情報を引き継いでいるということです。

子供ができ、孫ができ、さらにその子供ができるというように、子孫がずっと続いていくなら、その遺伝情報は、未来へもずっと伝えられることになります。

このことから、「全ての人は、『過去から未来へ伝えられる遺伝情報の流れの一部分』に存在している」と言うことができます。

また、知識、技術等の情報は、過去から未来へだけでなく、友人間、同僚間、男女間、世代間等で、双方向的に伝えられます。

また、それらの情報は、地域や国境を越え、世界規模で伝えられます。

このように考えると、全ての情報は、時間的には過去から未来へ、空間的には、

個人を介して四方八方へ双方向的に伝えられていることが分かります。

ですから、このことから、「全ての人は、『過去から未来へ、そして、個人を介して四方八方につながる情報ネットワークの一部分』として存在している」と言うことができます。

このように、全ての人は、「『過去から未来へ伝えられる遺伝情報』の流れの一部分」に存在し、同時に、「『過去から未来へ、そして、個人を介して四方八方につながる情報ネットワーク』の一部分」として存在しているのです。

ですから、「大和思想」では、「人間は、『過去から未来へつながる情報ネットワークの一部分』として存在している」と考えるのです。

さて、このように「大和思想」では、

- 1、人間は、「宇宙の生成、発展のメカニズム」の中に存在している
- 2、人間は「自然界」の中に存在している
- 3、全ての人は、様々な「全体」の一部分として存在している
- 4、人間は、『過去から未来へつながる情報ネットワーク』の一部分として存在している

と考えるのです。

これが、「大和思想」の世界観なのです。

そして、このような世界にあって、「共存共栄の世の中」を維持して生きるのが、「大和思想」の「生き方」なのです。

「大和思想」の価値観

世の中の全ての人は「幸福」を求めています。

ですから、「人間にとって『価値あるもの』」とは、「人間の『幸福』につながっているもの」のことだと言えます。

また、「価値のないもの」とは、「人間の『不幸』につながっているもの」のことだと言えます。

「人間にとって『価値あるもの』とは、「人間の『幸福』につながっているもの」のことですが、「大和思想」の「価値観」は、そこから一歩進んだところにあります。

「大和思想」は、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を「目的」に設定しています。

また、「大和思想」では、「『世の中の全ての人と共に幸福になる』ためには、世の中は『共存共栄の世の中』である必要がある」と考えます。

ですから、「大和思想」においては、「直接的、間接的にかかわらず、『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を維持、つくりだす物事」が「価値ある物事」

になります。

そして、「直接的、間接的にかかわらず、『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱す物事」が「価値のない物事」になります。

例えば、「どのような状況にあっても、決して『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱さないで生きている人」

『世のため』『人のため』になることを一生懸命行っている人」

『共存共栄の世の中を実現させ、維持する』ために必要な『情報』を必死に伝えている人」

「自ら率先して『家族』をまとめている人」

「子供をしっかりと育てている人」

このような人は、「価値ある人」であり、「立派な人」「すばらしい人」「尊い人」です。

また、「どのようなことがあっても、決して『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱さないで活動している会社」

「どのようなことがあっても、決して『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を

乱さないうで活動している国家」

『共存共栄の世の中を維持、つくりだす』ための活動」

『共存共栄の世の中を維持、つくりだすこと』につながる工業製品」

『共存共栄の世の中を維持、つくりだすこと』につながる情報」

『共存共栄の世の中を維持、つくりだすこと』につながる立ち居振る舞い」

『共存共栄の世の中を維持、つくりだすこと』につながる発言」

『共存共栄の世の中』を支えている物質や生物」

このようなものが、「価値ある物事」であり、「貴い物事」なのです。

逆に、「直接的、間接的にかかわらず、『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱す物事」は、「価値のない物事」です。

「ただ能力が高い人」「成績がいい人」「容姿がいい人」「裕福な人」「有名な人」「強い権力を持っている人」であっても、『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱している「なら、その人は「価値のない人」です。

また、「利益を上げている大きな会社」「世界で最も影響力のある国家」「ボランティア活動や慈善活動」「最新の技術を使った便利な工業製品」「人を楽し

ませる情報」「普通と言われている立ち居振る舞い」「悪意のない発言」であっても、それが、「直接的、間接的にかかわらず、最終的に『共存共栄の世の中（世の中の調和）を乱すこと』につながっている」なら、それは「価値のない物事」なのです。

このように、「大和思想」においては、「直接的、間接的にかかわらず、『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を維持、つくりだす物事」が「価値ある物事」なのです。

そして、「直接的、間接的にかかわらず、『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱す物事」が「価値のない物事」なのです。

世の中の全ての物事は、「『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を維持、つくりだしている」からこそ「価値」があるのです。

『世のため』『人のため』に存在している」からこそ「価値」があるのです。

これが、「大和思想」の価値観なのです。

「大和思想」における「いいこと（正しいこと）」と「悪いこと（間違っていること）」

世の中の全ての人は、普段の生活の中で、「いいこと（正しいこと）」と「悪いこと（間違っていること）」を見分け、「悪いこと（間違っていること）」をしないようにしていますが、ほとんどの人は、何が「いいこと（正しいこと）」で、何が「悪いこと（間違っていること）」なのかを明確に理解していません。

ほとんどの人は、それらを明確に理解していないまま、それらを判断しているのです。

ですが、「いいこと（正しいこと）」と「悪いこと（間違っていること）」を明確に理解していなかったら、「いいこと（正しいこと）」だと思ってやったことが、実は「悪いこと（間違っていること）」であったり、悪気はないのに、気付かずに「悪いこと（間違っていること）」をしてしまったりすることがあります。

また、誰かが「悪いこと（間違っていること）」をして、それを注意するとき、「それをやってはいけない理由」を明確に説明することができません。

ですから、「いいこと（正しいこと）」と「悪いこと（間違っていること）」

を明確に理解することは、実際は、とても重要なことだと言えます。

普段自分が関わっている「全体（集団、組織）」をまとめる（「共存共栄の世界」を維持している状態にする）上でも、「自分の『尊厳』を保つ（『自分が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされている状態』を保つ）」上でも、とても重要なことだと言えるのです。

つまり、人間が「幸福」になる上で、とても重要なことだと言えるのです。

さて、このように、「いいこと（正しいこと）」と「悪いこと（間違っていること）」を明確に理解することは、とても重要なことなのですが、実際に「いいこと（正しいこと）」「悪いこと（間違っていること）」とは、どのようなこと

を言うのでしょうか？

「大和思想」は、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を「目的」に設定しています。

また、「大和思想」では、「『世の中の全ての人と共に幸福になる』ためには、世の中は『共存共栄の世の中』である必要がある」と考えます。

ですから、先ほど説明したように、「大和思想」においては、「直接的、間接的にかかわらず、『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を維持、つくり出す物事」が「価値ある物事」で、「直接的、間接的にかかわらず、『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱す物事」が「価値のない物事」です。

そこから導き出すと、「直接的、間接的にかかわらず、『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を維持、つくりだす行為」が「いいこと（正しいこと）」になります。

そして、「直接的、間接的にかかわらず、『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱す行為」が「悪いこと（間違っていること）」になります。

例えば、「物を盗むこと」や「人を殺すこと」は、誰でも「悪いこと（間違っていること）」だと考えますが、「大和思想」においては、その理由は、「それらは『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱す行為」だから」です。

もし、「物を盗むこと」や「人を殺すこと」が、「悪いこと（間違っていること）」ではなく、「いいこと（正しいこと）」、もしくは「やってもいいこと」であるなら、いたるところで「盗難」や「殺人」が起こり、「共存共栄の世の中（世の中の調和）」は乱れます。

そして、多くの人が「不幸」になります。

ですから、それらは「悪いこと（間違っていること）」なのです。

同じように、「自分勝手な行動」「わがままな生き方」「人を騙すこと」「約束を破ること」「人に悪い影響を与えること」「公序良俗に反する行為、服装を

すること」「環境を破壊すること」「動植物をむやみに殺すこと」等も、「『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱す行為」だから「悪いこと（間違っていること）」なのです。

それらを少し行なっただけでは、「共存共栄の世の中（世の中の調和）」は乱れません。

ですが、多くの人が、それらを行なったら、「共存共栄の世の中（世の中の調和）」は、確実に乱れます。

そして、「共存共栄の世の中（世の中の調和）」が乱れてしまったら、多くの人が「不幸」になるのです。

ですから、それらは「悪いこと（間違っていること）」なのです。

逆に、「『協調性』を持って人に接すること」「『家族』『会社』『国家』等における『自分の役割』をしっかりと果たすこと」「困っている人を助けること」「子供をしっかりと育てること」「『社会全体のこと』を考えて行動すること」「動植物をむやみに殺さないこと」等は、「いいこと（正しいこと）」です。

それらを少し行なっただけで「共存共栄の世の中（世の中の調和）」が実現するわけではありません。

ですが、それらの行為は、少なからず、「『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を実現させ、維持すること」につながっています。

つまり、それらは、少なからず、「世の中の全ての人を『幸福』にすること」につながっているのです。

ですから、それらは「いいこと（正しいこと）」なのです。

このように、「大和思想」においては、「直接的、間接的にかかわらず、『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を維持、つくりだす行為」が「いいこと（正しいこと）」なのです。

そして、「直接的、間接的にかかわらず、『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱す行為」が「悪いこと（間違っていること）」なのです。

また、「大和思想」においては、「いいこと（正しいこと）」と「悪いこと（間違っていること）」が明確なので、「正義」という言葉の意味も明確です。

「正義」とは、単純に言うところ「正しいこと」という意味で、特に、「間違っていること」に対して、その「正しさ」を強調するときに使われます。

ですが、この「正しい」というのが、「どういう意味で『正しい』のか」が明確でなければ、「正義」の意味も明確になりません。

多くの場合、「いいこと（正しいこと）」の意味が明確でないまま「正義」という言葉が使われているので、「正義」の意味も曖昧です。

ですが、「大和思想」においては、「いいこと（正しいこと）」の意味が明確なので、「正義」の意味も明確です。

「大和思想」においては、「いいこと（正しいこと）」とは、「直接的、間接的にかかわらず、『共存共栄の世の中』を維持、つくりだす行為」のことです。

ですから、「大和思想」における「正義」とは、『共存共栄の世の中（世の中の調和）を維持、つくりだしている』という意味で正しいこと」になります。

ですから、「正義のために戦う」「正義のために立ち上がる」という言い方がありますが、「大和思想」においては、それらは、『共存共栄の世の中を維持、

つくりだす』ために戦う」「『共存共栄の世の中を維持、つくりだす』ために立ち上がる」という意味になるのです。

このように、「大和思想」においては、「正義」の意味も明確なのです。

さて、このように、「大和思想」においては、「いいこと（正しいこと）」と「悪いこと（間違っていること）」が明確なのです。

ですから、「大和思想」を持って生きれば、「それは『いいこと』なのか、それとも『悪いこと』なのか？」と悩むことはありません。

また、一生、「悪いこと（間違っていること）」をしないで生きていくことが

可能です。

また、誰かが「悪いこと（間違っていること）」をして、それを注意するとき、「それをやってはいけない理由」を明確に説明することができます。

「それは『共存共栄の世の中（世の中の調和）を乱す行為』だからいけません」
「それを見ると『共存共栄の世の中（世の中の調和）』が乱れ、多くの人が『不幸』になるからやめなさい」

このように言うことができます。

「大和思想」においては、「直接的、間接的にかかわらず、『共存共栄の世の中の世の中の調和』を維持、つくりだす行為」が「いいこと（正しいこと）」です。

そして、「直接的、間接的にかかわらず、『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱す行為」が「悪いこと（間違っていること）」なのです。

「大和思想」における人間の存在価値

全ての「社会的生き物」に共通して言えることですが、「社会的生き物」における「個体」の「存在価値」は、「自分が所属している『社会』に貢献して生きる」ところにあります。

「社会的生き物」には、「社会」をつくり、その中で生活する性質があります。

ですから、「社会的生き物」における全ての「個体」は、自分が「望む」「望まない」にかかわらず、「社会を構成する一員」として「社会」の中で生活して

います。

これは、「『社会的生き物』における全ての『個体』は『社会』に依存している」ということであり、「『社会を存続させること』によってのみ、『生きること』と『種族を存続させること』ができる」ということです。

ですから、どのような「社会的生き物」でも、その「社会」に所属している全ての「個体」は、当然のこととして、「『自分が所属している社会を存続させる』ための働きかけ」をしています。

例えば、「アリ」「ハチ」「オオカミ」「ライオン」等は、その「社会（群れ）」に所属している全ての「個体」が、当然のこととして、「『自分が所属している社会（群れ）を存続させる』ための働きかけ」をしています。

彼らは、自分が所属している「社会（群れ）」がなくなったら、「自分が生きること」も「種族を存続させること」もできなくなります。

ですから、彼らは、当然のこととして、「『自分が所属している社会（群れ）を存続させる』ための働きかけ」をしているのです。

このように、「社会的生き物」における全ての「個体」は「社会」に依存しているのです。「社会的生き物」における全ての「個体」にとって、「『自分が所属している社会』を存続させること」は、「自分が生きること」と同じレベルで重要になります。

ですから、「『自分が所属している社会の存続』に大きく貢献している個体」は、必然的に、その「社会」を構成する全ての「個体」にとって「価値ある存在」となります。

逆に、「『その社会の存続』に貢献していない個体」は、「価値のない存在」となります。

それどころか、そもそも「社会」は、その「社会」を構成する全ての「個体」の「働き」によって成り立っているので、「社会」に所属しているにもかかわらず、「その社会の存続」に全く貢献していなかったら、その「個体」は、その「社会」にとって「不必要な存在」となります。

そのような「個体」は、「社会的生き物」の「本質」から言って、「存在して

いる意味がない」のです。

これらのことから分かるように、「社会的生き物」における「個体」の「存在価値」は、「自分が所属している『社会』に貢献して生きる」ところにあるのです。

「社会的生き物」における全ての「個体」は、「自分が所属している『社会』に貢献している」からこそ、「『自分が所属している社会を存続させるための働きかけ』をしている」からこそ、「存在価値」があるのです。

さて、このように、「社会的生き物」における「個体」の「存在価値」は、

「自分が所属している『社会』に貢献して生きる」ところにあるので、「人間の存在価値（『人間社会』における『個人』の存在価値）」も、当然、「『人間社会』に貢献して生きる」ところ、「『人間社会を存続させるための働きかけ』をして生きる」ところにあるのですが、「大和思想」における「人間の存在価値」は、そこから一歩進んだところにあります。

「大和思想」は、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を「目的」に設定しています。

また、「大和思想」では、「『世の中の全ての人と共に幸福になる』ためには、世の中は、『共存共栄の世の中』である必要がある」と考えます。

ですから、「大和思想」における「人間の存在価値」は、「『共存共栄の世の中』を維持、つくりだして生きる」ところにあります。

つまり、「家族」「地域社会」「友人の集まり」「学校」「会社」「国家」「世界」等の、普段自分が関わっている「全体」において、「『自ら率先して、その全体をまとめるための働きかけ（その全体を共存共栄の世の中を維持している状態にするための働きかけ）』をして生きる」ところに、「人間の存在価値」があるのです。

ですから、「大和思想」においては、どれだけ「能力が高い人」「成績がいい人」「容姿がいい人」「裕福な人」「有名な人」「強い権力を持っている人」であっても、「『普段自分が関わっている全体をまとめる』ための働きかけ（『共

存共栄の世の中を維持、つくりだす』ための働きかけ」を全くしていなかったら、その人は、「価値のない存在」「不必要な存在」となります。

逆に、どれだけ「能力が低い人」「成績が悪い人」「容姿が悪い人」「貧しい人」「有名でない人」「権力がない人」であっても、「『普段自分が関わっている全体をまとめる』ための働きかけ（『共存共栄の世の中を維持、つくりだす』ための働きかけ）」をしているなら、その人は、「価値ある存在」「必要な存在」となります。

「大和思想」においては、人を押しつけ、世の中の「調和」を乱してまで「地位」や「名声」や「財産」を手に入れた人は、「価値のない存在」「不必要な存在」です。

逆に、質素で目立たない生活をしていても、「『普段自分が関わっている全体をまとめる』ための働きかけ（『共存共栄の世の中を維持、つくりだす』ための働きかけ）」をしているなら、その人は「価値ある存在」「必要な存在」なのです。

また、「大和思想」においては、「『共存共栄の世の中の実現』に大きく貢献した人」「『共存共栄の世の中』に対する『貢献度』が高い人」「一生懸命、普段自分が関わっている『全体』をまとめている人」ほど、「より価値ある存在」「より価値ある人」です。

また、「人間の存在価値」と言うとき、人によっては、『人間の価値』の高低や、『全体をまとめる能力』の優劣を強く意識し、それらを競おうとしますが、「大和思想」においては、それらを競うことは重要ではありません。

なぜなら、『人間の価値』の高低や、『全体をまとめる能力』の優劣にこだわると、『よりできる人』には、より『価値』があり、『あまりできない人』には、あまり『価値』がない」という考えを持つようになり、「世の中の全ての人が『幸福』を感じられるようにする」という、「大和思想」の本来の趣旨からずれてしまうからです。

「能力」「人を取り巻く状況」「運」等は人によって違うので、どれだけ「普段自分が関わっている全体をまとめる」ための働きかけ、「共存共栄の世の中を維持、つくりだす」ための働きかけ」をしようと思っても、「上手く行なえる

人」「上手く行なえない人」「たくさん行なえる人」「あまり行なえない人」がいます。

ですが、たとえ「上手く」「たくさん」は行なえないとしても、「『普段自分が関わっている全体をまとめる』ための働きかけ（『共存共栄の世の中を維持、つくりだす』ための働きかけ）」をしているなら、その人は、「『共存共栄の世の中』を支える重要な存在」です。

そのような「重要な存在」である人を、「あまり『価値』がない」と考えるのは、「大和思想」の本来の趣旨からずれているのです。

ですから、「大和思想」においては、「『人間の価値』の高低」や「『全体をまとめる能力』の優劣」を競うことは重要ではないのです。

それよりも、「『自分にできること』を精一杯行なうこと」の方が重要なのです。

『共存共栄の世の中の実現』に大きく貢献した人」「世の中に対する『貢献度』が高い人」は、それはそれで評価されるべきですが、それは、「『他人と競って勝ったから』評価される」のではなく、あくまで、「『共存共栄の世の中の実現』に大きく貢献したから』評価される」のです。

さて、このように、「大和思想」においては、「人間の存在価値」は、「『共存共栄の世の中』を維持、つくりだして生きる」ところにあるのです。

ですから、「大和思想」においては、「『共存共栄の世の中』を維持、つくりだして生きている」なら、誰にでも「存在価値」があります。

「子供」「大人」「老人」「男性」「女性」「能力が高い人」「能力が低い人」「裕福な人」「貧しい人」「政治家」「国民」、また「職業」にかかわらず、「文化」にかかわらず、「国籍」にかかわらず、全ての人に「存在価値」があるのです。

「大和思想」における「人間の存在価値」は、このようなものなので、「大和思想」を持って生きれば、誰でも「『自分の存在価値』を実感すること」ができません。

人間が「幸福」になる上で、「『自分の存在価値』を実感できること」は、とても重要ですが、「大和思想」を持って生きれば、誰でも、一生、「『自分の存在価値』を実感すること」ができるのです。

「大和思想」においては、「人間の存在価値」は、「『共存共栄の世の中』を維持、つくりだして生きる」ところにあります。

人間は、「『共存共栄の世の中』を維持、つくりだして生きる」からこそ「存在価値」があるのです。

「大和思想」を持つことによつて「生きる目的」と「心の支え」を手に入れる

人間は、「生きる目的」を持たず、「ただ何となく」毎日を過ごしているだけでは、「生き甲斐」や「張り合い」を感じることができません。

また、「生きる目的」を持っていなかったら、「自分は、何のために生きているのだろうか?」と「漠然とした不安」に襲われることもあります。

ですから、人間が「より充実した人生」「より楽しい人生」を送るためには、

「生きる目的」を持つ必要があります。

「大和思想」には、「世の中の全ての人と共に『幸福』になる」という「目的」があります。

ですから、「大和思想」を持って生きれば、「世の中の全ての人と共に『幸福』になる」という「生きる目的」を手に入れることができます。

そして、常に『普段自分が関わっている全体をまとめる』ための働きかけ（『共存共栄の世の中を維持、つくりだす』ための働きかけ）をして生きるようになるので、「ただ何となく」「だらだらと」過ごすことがなくなり、「生き甲斐」や「張り合い」を感じられるようになります。

また、「生きる目的」が手に入るので、「自分は、何のために生きているのだろう？」と「漠然とした不安」に襲われることもなくなります。

このように、「大和思想」を持って生きれば、「生きる目的」を手に入れることができるので、「生き甲斐」や「張り合い」を感じられるようになりますし、「漠然とした不安」に襲われることもなくなるのです。

つまり、「大和思想」を持って生きれば、「より充実した人生」「より楽しい人生」を送れるようになるのです。

また、人間が「力強く生きていく」ためには「心の支え」が必要になりますが、「大和思想」を持って生きれば、「大和思想」が「心の支え」になります。

人は誰でも、「主張」するとき、「決断」するとき、「指示」するとき、「改善」するとき、「撤退」するとき等に、「この『行動』は正しい」という「確信」が持てなければ、「不安」になります。

同じように、人間は、「自分の『生き方』は正しい」という「確信」が持てなければ、人生の様々な場面で「不安」になり、「混乱」し、「力強く生きていくこと」ができなくなります。

ですから、人間が「力強く生きていく」ためには、「自分の『生き方』は正しい」という「確信」が持てる、「心の支え」になる「思想」を持つ必要があります。

す。

「思想」が「心の支え」として有効に機能するためには、「たぶん大丈夫」とか「正しいと思う」程度のもではなく、「どう考えても『絶対に正しい』思想」である必要があります。

「大和思想」は、「自分一人が『幸福』になること」を「目的」にしているのではなく、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を「目的」にしています。

ですから、「大和思想」は、「どう考えても『絶対に正しい』正当性がある思

想」だと言えます。

また、「大和思想の理論」は、

世の中の全ての人が、自ら率先して、普段自分が関わっている「全体（集団、組織）」をまとめる（「共存共栄の世の中を維持している状態」にする）。

そうすることによって、「共存共栄の世の中」が実現し、維持される。

また、全ての人の「生き方」が「価値ある生き方」になる。

そして、「共存共栄の世の中」が実現し、維持され、全ての人の「生き方」が「価値ある生き方」になることによって、世の中の全ての人々が「幸福」になる。

というものですが、世の中の全ての人が、自ら率先して、普段自分が関わっている「全体（集団、組織）」をまとめれば（「共存共栄の世の中を維持している状態」にすれば）、「共存共栄の世の中」が実現し、維持されることは間違いありません。

また、世の中の全ての人が、そのような「生き方」をすれば、世の中の全ての人の「生き方」が、「価値ある生き方」になることも間違いありません。

また、「共存共栄の世の中」が実現し、維持され、全ての人の「生き方」が「価値ある生き方」になれば、世の中の全ての人が「幸福」になれることも間違いありません。

つまり、「大和思想の理論」は、「どう考えても『絶対に正しい』理論」なのです。

このように、「大和思想」には、「どう考えても『絶対に正しい』正当性」がありますし、「大和思想の理論」は、「どう考えても『絶対に正しい』理論」なのです。

ですから、「大和思想」を持って生きれば、「大和思想」が「心の支え」になるのです。

「大和思想」を持って生きれば（常に「共存共栄の世の中」を維持、つくりだし

て生きれば、心に「やましいこと」がないので、常に、誇りを持って堂々としていられます。

自分の行動を理解してくれる人がいなくても、「自分は『共存共栄の世の中』を支えている」という「確信」が持てるので、常に「前向き」でいられます。

また、「大和思想」を持って生きれば、『共存共栄の世の中』を支持する思想」を持つ全ての人が「仲間関係」「協力関係」にあるので、「孤独感」がなくなります。

ですから、「大和思想」を持って生きれば、「大和思想」が「心の支え」になるのです。

さて、このように、「大和思想」を持って生きれば、「生きる目的」と「心の支え」を手に入れることができるのです。

人間が「より充実した人生」「より楽しい人生」を送るためには、「生きる目的」を持つ必要があります。

また、人間が「力強く生きていく」ためには、「心の支え」が必要になります。「大和思想」を持って生きれば、この「生きる目的」と「心の支え」を手に入れることができるのです。

「自分さえ良ければいいという考え」と
「自分達さえ良ければいいという考え」
について

人間が「幸福」になるためには、「幸福になれる思想」を持って生きる必要がありますが、世の中には、「一見『幸福になれる思想』のようで、実際は『不幸になる思想』」がたくさんあります。

そして、多くの人が、そのような「思想」を持つことによって「不幸」になっ

ています。

『自分さえ良ければいい』という考え」と『自分達さえ良ければいい』という考え」は、そのような「思想」の最たるものです。

そこで、ここでは、「『自分さえ良ければいい』という考え」と『自分達さえ良ければいい』という考え」について説明したいと思えます。

『自分さえ良ければいい』という考え」を持って生きている人は、いつでも、どこでも、自分のことしか考えず、周りの人のことも、自分が所属している「集団」や「社会」のことも考えていません。

そういう人は、常に、「少しでも『いい思い』をしたい」「少しも損をしたくない」「どうすれば、みんなより得することができるだろう」「自分さえ良ければ、みんなのことはどうでもいい」と考えています。

そして、そのような「生き方」が、自分にとって「得」であり、自分の「幸福」につながっていると思っっています。

たしかに、目先のことだけを考えるなら、「自分のことだけ」を考えて生きる方が「得」かもしれませぬ。

ですが、そのような「思想」を持って生きていると、最終的には「不幸」になってしまいます。

『自分さえ良ければいい』という考え』に基づいた行動」は、本人が思っている以上に、周りの人に気付かれます。

ですから、『自分さえ良ければいい』という考え」を持って生きていると、いずれ、周りの人が、自分の行動を阻止したり、自分に抵抗したりするようになり、「人間関係」が悪くなってしまいます。

また、『自分さえ良ければいい』という考え』に基づいた行動」を続けていると、その影響を受けて、自分以外にも、『自分さえ良ければいい』という考え』に基づいた行動」をする人が現れます。

そして、『自分さえ良ければいい』という考え」を持つ者同士で、牽制し合い、騙し合うようになるので、「争いが多い状況」になってしまいます。

また、「『自分さえ良ければいい』という考え」を持って生きていくと、自分がそういう「考え」なので、周りの人の「言動」も、「『自分さえ良ければいい』という考え」に基づいたもの」に思えてしまいます。

そして、「何か意味があるのではないか?」「自分のことを騙そうとしているのではないか?」と、必要以上に気になってしまいます。

ですから、「『自分さえ良ければいい』という考え」を持って生きていくと、いずれ、「自分以外の全ての人」が信用できなくなり、「敵」に見えるようになり、「人間不信」になってしまいます。

また、「『自分さえ良ければいい』という考え」を持った、「わがままな人」「自分勝手な人」を快く思う人はいないので、そのような「考え」を持って生きていくと、いずれ、みんなに嫌われ「孤独」になってしまいます。

これらのことから分かるように、「『自分さえ良ければいい』という考え」には、「『自分』と『自分以外の全ての人』を『対立』させる性質」と「自分を『孤独』にする性質」があるのです。

ですから、「『自分さえ良ければいい』という考え」を持って生きていると、最終的には「不幸」になるのです。

また、世の中には、「『自分達（一部の人間）さえ良ければいい』という考え」を持って生きている人がいますが、そのような「考え」を持って生きていても、最終的には「不幸」になります。

『自分達さえ良ければいい』という考えを持って生きていると、「自分達以外の全ての人」と「対立」することになりますし、その「対立」は、その「考え」を改めるまで永遠になくなりません。

また、「自分達さえ良ければいい」と言っているも、長い目で見ると、『自分達』と『自分達以外の人』を明確に区別し続けること」はできないので、はじめは、「自分達全員」が、何らかの「利益」を得ることができていたとしても、いずれ、「自分達」の中から「利益を得られない人」が現れるようになります。つまり「利害の対立」が生まれます。

そして、その結果、「自分達」同士で争うようになり、「内部分裂」してしまいます。

これらのことから分かるように、「『自分達さえ良ければいい』という考え」には、「『自分達』と『自分達以外の全ての人』を『対立』させる性質」と「自分達同士を『対立』させる性質」があるのです。

ですから、「『自分達さえ良ければいい』という考え」を持って生きていても、最終的には「不幸」になるのです。

このように、人間は、「『自分さえ良ければいい』という考え」や「『自分達さえ良ければいい』という考え」を持って生きていると、最終的には「不幸」になるのです。

『自分さえ良ければいい』という考えや『自分達さえ良ければいい』という考えに則った「生き方」は、一見、「自由」で「気楽」で「いい思い」ができるように思えるので、目先のことしか考えない人は、安易に、そのような「生き方」をしてしまいます。

ですが、『思想』と『その思想を持っている人の行動』と『その行動の結果起こること』の「関連性」をよく考えれば、「そのような『思想』を持って生きていると、最終的に『不幸』になること」は分かるはずなのです。

人間が「幸福」になるためには、『自分の尊厳が保たれていること（自分が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされていること）』によって得られる『精神的充足、安定』が必要不可欠ですが、『自分さえ良ければいい』という考えや『自分達さえ良ければいい』という考えを持って生きて

いると、周りの人と「対立」することになるので、周りの人から「価値ある存在」「尊い存在」として認めてもらえなくなります。

また、そのような「生き方」は「価値ある生き方」ではないので、いずれ、「自分の『尊厳』を保つこと（『自分は価値ある存在、尊い存在であると実感すること』）」はできなくなります。

ですから、『自分さえ良ければいい』という考えや、『自分達さえ良ければいい』という考えを持って生きていると、たとえば、一時的には「幸福」を感じることができたとしても、最終的には「不幸」になるのです。

人間が「幸福」になるためには、『自分の尊厳が保たれていること』によっ

て得られる『精神的充足、安定』が必要不可欠です。

ですから、人間が「幸福」になるためには、「『自分の尊厳を保つこと（自分が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされている状況を保つこと）』ができなくなる思想」を持つてはいけません。

つまり、「『自分さえ良ければいい』という考え」や「『自分達さえ良ければいい』という考え」を持つてはいけません。

人間が「幸福」になるためには、このことをしっかり理解する必要があるのです。

「自分と他人を比較し、その優劣にこだわる考え（優れている方、勝っている方に価値があるという価値観）」について

世の中には、「自分と他人を比較し、その『優劣』にこだわる考え（『優れている方』『勝っている方』に価値があるという価値観）」を持っている人がいます。

確かに「『優れている方』『勝っている方』に価値がある」という考えは、あ

る意味では正しいです。

ですが、人間は、そのような「考え（価値観）」を持って生きていくと、最終的には「不幸」になってしまいます。

「比較」は、それを行なうと、それぞれの「違い」が分かるので、「現状」を「理想の状態」に変えたり、何らかの「目的」を実現させたりする上で有効です。

例えば、スポーツ選手が「理想のフォーム」を身に付けるときに、「理想のフォーム」と「現状のフォーム」を「比較」すれば、「理想的でない部分」を知ることができるので、「理想的でない部分」を「理想の状態」に変えることができます。

また、「会社」において、『利益を出すことができる』経営の仕方」を知りたいときに、『利益が出ている会社』の経営の仕方」と『利益が出ていない会社』の経営の仕方」を「比較」すれば、『利益を出すことができる』経営の仕方」を知ることができます。

また、Aという「生き方」と、Bという「生き方」のうち、どちらかを選ばなければならぬときに、「Aを選んだときに『得られるもの』と『得られなくなるもの』」と「Bを選んだときに『得られるもの』と『得られなくなるもの』」を「比較」すれば、どちらが、より自分に合った「生き方」かを知ることができます。

このように、「比較」は、「現状」を「理想の状態」に変えたり、「目的」を
実現させたりする上で有効な「手段」なのですが、世の中には、「比較すること」
をこのようなものとして捉えず、「自分と他人を比較し、その『優劣』や『勝ち
負け』にこだわる人」がいます。

また、こだわっているつもりはなくても、「意識し過ぎている人」がいます。

このような人は、「自分と他人を比較し、その『優劣』にこだわる考え（思
想）」を持っているわけですが、これは、「『優れている方』『勝っている方』
に価値があるという価値観」を持っているということでもあります。

ですが、人間は、このような「考え（価値観）」を持って生きていると、最終
的には「不幸」になってしまいます。

人間は、どれだけ頑張っても、世の中の全ての人に勝ち続けることなどできませんし、「能力」「体力」「容姿」等は年齢とともに衰えるので、「相手より優れているところ」「相手に勝っているところ」に「自分の価値」を見い出している人は、年齢と共に、「自分」「価値」を見い出すことができなくなりそうです。

ですから、「自分と他人を比較し、その『優劣』にこだわる考え（『優れている方』『勝っている方』に価値があるという価値観）」を持っている人は、一時的には「幸福」を感じることができたとしても、年齢と共に「幸福」を感じられなくなってしまうです。

また、そのような「考え（価値観）」を持っていると、「自分は『集団』の中で、どの位置にいるのか」「何番目なのか」が、必要以上に気になってしまいま

す。

また、「自分より優れている人」や「成功している人」を必要以上にうらやましく思い、「嫉妬心」や「劣等感」を強く持ってしまいます。

ですから、そのような「考え（価値観）」を持っていないと、「心の安らぎ」が得られず、精神的に苦しくなってしまいます。

また、そのような「考え（価値観）」を持っている人は、常に相手に勝とうとし、自分を良く見せようとし、自分が下であることに神経質になり、自分より下だと思ふ相手に対しては「見下した態度」になり、自分より上だと思ふ相手に対しては「卑屈」になってしまいます。

ですから、そのような「考え（価値観）」を持っていると、「いい人間関係」を築くことや、本当の意味での「仲間意識」「共同体意識」を持つことができず、精神的に「孤独」になってしまいます。

また、そのような「考え（価値観）」を持っていると、「相手の意見を受け入れること」が、「相手に負けること」のように思えてしまうので、頑固になり、「人の意見を受け入れること」ができなくなります。

ですから、そのような「考え（価値観）」を持っていると、成長することができなくなってしまう。

このように、「自分と他人を比較し、その『優劣』にこだわる考え（『優れている方』『勝っている方』に価値があるという価値観）」を持っていると、年齢と共に、自分に「価値」を見い出すことができなくなり、「精神の安定」や「心の安らぎ」が得られなくなり、精神的に苦しくなり、精神的に「孤独」になり、成長することができなくなるのです。

ですから、人間は、そのような「考え（価値観）」を持って生きていくと、最終的には「不幸」になるのです。

さて、人間は、「自分と他人を比較し、その『優劣』にこだわる考え（『優れている方』『勝っている方』に価値があるという価値観）」を持って生きていくと、最終的に「不幸」になるのですが、世の中には、そのような「考え（価値観）」を持っている人が、たくさんいるように思えます。

そのような「考え（価値観）」を持っている人は、常に「成績」「学歴」「経歴」「能力」「容姿」「立場」「収入」「知名度」「家」「車」、その他あらゆるものを「比較」し、その「優劣」を気にしています。

そして、常に相手に勝とうとしています。

ですが、そういう人は、「自分は、何のために相手に勝とうとしているのか」を考えたことがあるのでしょうか？

「たとえ相手に勝ったとしても、『幸福』になれなければ意味がない」ということを考えたことがあるのでしょうか？

人間は「幸福」を求めているのですから、「相手に勝つこと」にこだわるのではなく、「幸福になること」にこだわるべきだと言えます。

そして、実際に「幸福になれる思想」を持って生き、「幸福な人生」を手に入れるべきだと言えます。

人間が「幸福」になるためには、このことをしっかり理解する必要があります。人間が「幸福」になるためには、「優劣」や「勝ち負け」にこだわるのではなく、「幸福になること」にこだわる必要があることを、そして、実際に「幸福になれる思想」を持って生きる必要があることをしっかり理解する必要があります。

「自由」について

「自由」という言葉には、いい響きがあります。「言論の自由」「選択の自由」「自由な考え」「自由な生き方」。

全ての人は「自由」であるべきですし、「自由」のない人生などは苦痛でしかありません。

特に、極端に「自由」が制限されている中で、生きていかなければならないとしたら、それは苦痛以外の何でもありません。

多くの人は、このように考えていますし、私も全くそのとおりだと思います。

ですが、この「自由」とは、あくまで『『ルール』の中における自由』のことであって、「無制限の自由」のことではありません。

「無制限の自由」など、世界中どこを探しても存在しませんし、するはずもありません。

それはなぜでしょう？

それは、人間が「社会的生き物」だからです。

人間は、「集団」や「社会」をつくり、その中で生活する性質を持つ「社会的生き物」なので、様々な「集団」や「社会」をつくりまします。

この「集団」や「社会」は、一定の秩序を保つ必要があるのです、何らかの「ルール」を必要とします。

そして、「集団」や「社会」を構成する人は、その必要性から、何らかの「ルール」をつくり、その「ルール」に従って「集団」や「社会」を運営します。

このように、全ての「集団」や「社会」は、一定の秩序を保つ必要があるのです、

「集団」や「社会」には、必ず「ルール」があるのです。

つまり、世の中には様々な「集団」や「社会」が存在していますが、「『集団』や『社会』が存在している」ということは、イコール、「それらは、それぞれの『ルール』を持って存在している」ということなのです。

ですから、世の中には、「無制限の自由」など存在しないのです。

人間が「社会的生き物」である以上（「社会」の中で生活している以上）、世界中どこを探しても存在するはずがないのです。

さて、人間は「社会」の中で生活しているので、世の中には「無制限の自由」どころか、いたるところに「ルール」があります。

「国家」には、もちろん「ルール」がありますし、「会社」や「学校」にもそれぞれの「ルール」があります。

また、「電車」や「バス」を利用するときにも、そこには「ルール」がありません。

このように、世の中には、いたるところに「ルール」があるのですが、世の中には、『ルール』に従うこと」を非常に嫌う人がいます。

ですが、もし、「集団」や「社会」に「ルール」がなかったらどうなるのでしょうか？

例えば、「交通ルール」がなかったらどうなるでしょうか？

「車線」も「信号」も「速度制限」もない、「交通ルール」が全くない状況では、どのようなことが起こるでしょうか？

「交通量が多い地域」では何が起こるでしょうか？「交差点」や「長い直線道路」では何が起こるでしょうか？

果たして、そのような状況で、「目的地」まで、早く、安全に辿り着くことができるのでしょうか？

それは、不可能だと言わざるを得ません。そのような状況では、いたるところで、事故や渋滞が起こるのは間違いありません。

つまり、交通の秩序を保ち、車の流れをスムーズにし、誰もが「目的地」まで、早く、安全に辿り着けるようにするためには、「交通ルール」が必要になるのです。

そして、全ての人が、「交通ルール」に従う必要があるのです。

また、「国家」には、「法律」という「ルール」がありますが、もし、「法律」

がなかったら、どうなるでしょう？

「法律」がなかったら、全ての人が思い思いに行動するので、「国家」の秩序は保てません。

また、「法律」があっても、多くの人が「法律」を無視していたら、やはり「国家」の秩序は保てません。

世界には、様々な理由で秩序が保たれていない「国家」（「犯罪」が多い国）があります。それは、「多くの人が『法律』を無視している」ということなのです。

このことから分かるように、「国家」の秩序を保つためには、「法律（ルー

ル」が必要になるのです。

そして、その「国家」を構成する全ての人が、その「法律（ルール）」に従う必要があるのです。

また、人が二人以上集まって行動を共にするだけでも「ルール」は必要です。

「一緒に食事をする」「会話を楽しむ」「協力して生きていく」、その他どのようなことをする場合でも、複数の人が行動を共にするときには、そこには、必ず、何らかの「目的」がありますが、その「目的」を実現させるためには、その「集団」の秩序を保ち、その活動（行動）を円滑に進める必要があります。

そして、そのためには、「ルール」や「ルール」というほどのものではなくても、何らかの「決まり」「暗黙のルール」のようなものは必要になります。

たとえば、「気遣いをする」「相手が嫌がることはしない」程度の「決まり」「暗黙のルール」のようなものでも、それがなければ、その「目的」を実現させることはできないのです。

また、「ルール」があつたとしても、それぞれが「ルール」を無視し、無制限に「自由」に行動していたら、「全体のまとまり」が得られなくなるので、やはり、その「目的」を実現させることはできないのです。

このことから分かるように、人が二人以上集まって行動を共にするだけでも、必ず、何らかの「ルール」が必要になるのです。

そして、その「集団」を構成する全ての人が、その「ルール」に従う必要があるのです。

さて、これらことから分かるように、「集団」や「社会」の秩序を保つためには、「ルール」が必要になるのです。

そして、その「集団」や「社会」を構成する全ての人が、その「ルール」に従う必要があるのです。

「人間社会」の秩序を保つ場合も同じで、そのための「ルール」が必要になりますし、「人間社会」を構成する全ての人が、その「ルール」に従う必要があるの

です。

ですから、世の中には『ルール』に従うこと」を非常に嫌う人がいますが、人間が「社会的生き物」である以上は（「社会」の中で生活している以上は）、このことに関しては、「世の中とは、そういうものだ」と受け入れるしかないのです。

人間は「社会的生き物」なので、「世の中には『無制限の自由』など存在しない」ということは、全ての人が理解しなければならないことなのです。

人によっては、それでも、無制限に「自由」に行動したいと思うかもしれません

ん。

ですが、もし、普段自分が関わっている「家族」「友人の集まり」「学校」「会社」「国家」「世界」等に、何の「ルール」もなかったら、また、あったとしても、その「集団」や「社会」を構成する全ての人が「ルール」を無視して行動していたらどうなるのでしょうか？

何の「ルール」もなく、また、あったとしても、全ての人が「ルール」を無視して行動していたら、それらの秩序は確実に乱れます。

そして、その「集団」や「社会」を構成する全ての人が、そこから「ストレス」を受け、苦しみ、誰一人「幸福」を感じられなくなるのです。

「自由」「自由」と言って「無制限の自由」を求めながら、同時に「秩序のある社会」を求めるのは矛盾です。

「無制限に『自由』に行動すること」と「『秩序のある社会（幸福を感じられる社会）』を維持すること」は、両立し得ないのです。

私達は「自由」という言葉の魔力から覚め、「人間が『幸福』になるためには、『個人の自由』より『全体のまとまり』を優先させる必要があること」を理解しなければなりません。

人間が「幸福」になるために必要なのは「自由」ではありません。

人間が「幸福」になるために必要なのは「ルール」です。

「世の中の全ての人が『幸福』になれるルール」をつくり、世の中の全ての人がそれに従って生きる。

そうすることによってのみ、世の中の全ての人が「幸福」になれるのです。

まとめ

それでは、ここで、一章の「まとめ」をしたいと思えます。

一章では、『大和思想』とは、どのような『思想』かを説明しました。

「大和思想」とは、『世の中の全ての人が、自ら率先して、普段自分が関わっている全体をまとめること』によって、『共存共栄の世の中』を実現させ、世の中の全ての人と共に『幸福』になる」という「思想」です。

世の中の全ての人は「幸福」を求めています。

ですから、「大和思想」は、「自分一人が『幸福』になること」ではなく、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を「目的」に設定しています。

また、「大和思想」では、「『世の中の全ての人と共に幸福になる』ためには、世の中は、『共存共栄の世の中』である必要がある」と考えます。

また、「大和思想」では、「『共存共栄の世の中を實現させ、維持する』ためには、世の中の全ての人が、自ら率先して、『家族』『地域社会』『友人の集まり』『学校』『会社』『国家』『世界』等の、普段自分が関わっている『全体

（「集団、組織」をまとめる（『共存共栄の世の中を維持している状態』にする）必要がある」と考えます。

また、人間が「幸福」になるためには、「自分の『尊厳』を保つ（『自分が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされている状況』を保つ）」必要があるですが、「大和思想」では、「『自分の尊厳を保つ』ためには、常に、自ら率先して、『普段自分が関わっている全体をまとめるための働きかけ（共存共栄の世の中を維持している状態にするための働きかけ）』をして生きる必要がある」と考えます。

世の中の全ての人が、自ら率先して、普段自分が関わっている「全体（集団、組織）」をまとめる（『共存共栄の世の中を維持している状態』にする）。

そうすることによって、「共存共栄の世の中」が実現し、維持される。

また、全ての人の「生き方」が「価値ある生き方」になる。

そして、「共存共栄の世の中」が実現し、維持され、全ての人の「生き方」が「価値ある生き方」になることによって、世の中の全ての人々が「幸福」になる。

これが「大和思想の理論」なのです。

このように、「大和思想」は、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を「目的」に設定し、そこから逆算して導きだされた「思想」なのです。

ですから、世の中の全ての人が「大和思想」を持って（『大和思想の理論』に則って）生きれば、世の中の全ての人が「幸福」になれるのです。

さて、世の中の全ての人は「幸福」を求めています。ほとんどの人は、「『幸福』になるためには『幸福になれる思想』を持って生きる必要がある」ということを理解していません。

ですが、「思想」と「その『思想』を持っている人の行動」と「その『行動』の結果起こること」は関連しているので、「幸福」になるためには、「『幸福』になれる思想」を持って生きる必要があります。

世の中には、「一見『幸福になれる思想』のようで、実際は『不幸になる思

想』がたくさんあります。

例えば、「『自分さえ良ければいい』という考え」「『自分達さえ良ければいい』という考え」「自分と他人を比較し、その『優劣』にこだわる考え（『優れている方』『勝っている方』に価値があるという価値観）」「自由」等がそうですが、そのような「思想」を持って生きると、最終的には「不幸」になってしまいます。

人間は、それぞれが「独立した個人」なので、どのような「思想」を持って生きるかは、それぞれが決めることです。

ですが、「思想」と「その『思想』を持っている人の行動」と「その『行動』の結果起こること」は関連しているので、「幸福」になるためには、あくまで、

『幸福』になれる思想」を持って（『幸福』になれる理論」に則って）生きる必要があるのです。

「大和思想」は、このことを踏まえ、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を「目的」に設定し、そこから逆算して導きだされた「思想」なのです。

ですから、世の中の全ての人が「大和思想」を持って（『大和思想の理論』に則って）生きれば、世の中の全ての人が「幸福」になれるのです。

さて、ここまで読み進めてきた皆さんは、「大和思想」とは、どのような「思想」か、大体は理解できたと思います。

「大和思想」は、単純に言うと、「『共存共栄の世の中を維持すること』によって、世の中の全ての人と共に『幸福』になる」という「思想」、『世の中の調和を保つこと』によって、世の中の全ての人と共に『幸福』になる」という「思想」です。

「共存共栄の世の中（『調和』が保たれている世の中）」とは、ある意味平凡で、変化の少ない世の中です。

ですから、人によっては、「そのような世の中は、退屈でつまらない」と言うかもしれません。

ですが、人間が「幸福」になるためには、「『自分の尊厳が保たれていること（自分が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされていること）』」によって得られる『精神的充足、安定』」が必要不可欠ですし、それを得るためには、世の中は「共存共栄の世の中」である必要があるのです。

「幸福」と言うと、「何か、特別すばらしいもの」のように思えますが、実際は、それは、「平凡で、変化の少ない生活の中にあるもの」なのです。

人間が「幸福」になるためには、「平凡で、変化の少ない生活の中に『幸福』を見い出すこと」こそが必要なのです。

「大和思想」は、このような、「『世の中の調和（共存共栄の世の中）を保つこと』によって、世の中の全ての人と共に『幸福』になる」という「思想」なのです。

世の中には様々な「思想」がありますが、「大和思想」は、世の中の「調和」を重んじる、「『和の精神』に則った思想」なのです。

一章では、まず、このことを覚えてください。

「大和思想」は、「和を以って貴しと為す」のです。

大和思想とは

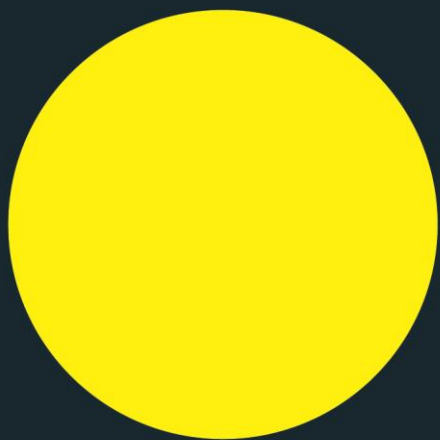
世の中の全ての人が 自ら率先して

普段自分が関わっている全体をまとめることによって

共存共栄の世の中を實現させ

世の中の全ての人と共に幸福になる

という思想である



やまと

しそろう

一章